

平成30年平和祈念滋賀県戦没者追悼式

恒久平和の実現に向けて



発行所
一般財団法人滋賀県遺族会
滋賀県大津市におの浜4丁目2-34
滋賀県遺族会館
電話 (077)522-7227
FAX (077)522-7233
発行責任者
滋賀県遺族会会長
大長 弥宗治



追悼の辞を述べる大長弥宗治滋賀県遺族会会長

平成30年平和祈念滋賀県戦没者追悼式が870人の参列のもと、8月25日、滋賀県立文化産業交流会館で行われた。滋賀県主催の式典としては5回目となる。式場は、「滋賀県戦没者之霊」の標柱と1200本の菊花で飾られた祭壇が正面に据えられ、左右には登壇者や字幕、手話通訳の映像を映し出す大型スクリーンが設置された。

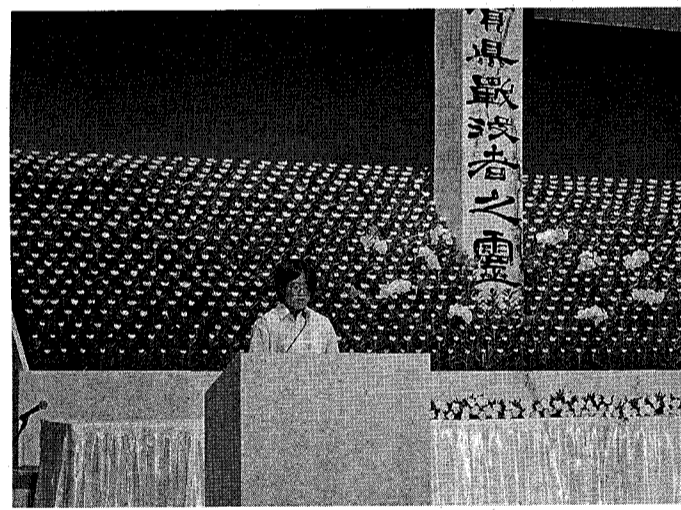
式典は滋賀県遺族会青年委員会林祐美子さんの歯切れよい司会で進められ、国歌斉唱のあと、三日月大造滋賀県知事の式辞で始まった。知事は「帰らざる尊い命を無にすることなく、戦争から学んだ教訓を胸に刻み、二度と戦禍を繰り返さない決意と共に、恒久平和の実現に向けて」と誓った。

川島隆二滋賀県議長、大長弥宗治滋賀県遺族会会長の追悼の辞が読み上げられ

た。大長遺族会長は冒頭で、隣家から流れるラジオの声で玉音放送を聞いたことや「ぼくの家にはなぞお父ちゃんがいないうの」と詰りめられる母の心中を、言葉を詰まらせて語った。また、「戦後73年経過し戦後生まれが8割を占め、8月6、9、15の日の意味を知らない人が多い。人は二度死ぬと言われる。一度は肉体の死。二度目は存在を忘れられる死である。私たちは戦没者を二度死なせることがあってはいけません。悲しみの歴史が繰り返されぬよう、戦争の愚かさや平和の尊さを次世代にしっかりと語り伝えることを誓う」と結んだ。

献花は滋賀県警察音楽隊の奏でる曲「英雄」が繰り返され流れるなか、来賓や各界代表が半時間余にわたり菊花を祭壇に捧げた。参加者の目を惹いたのは戦没者の妻代表の西岡芳枝さんだ。老人車に寄り添いながらも百歳にして元気に壇上に上がり、参加者に感動を与えた。

次いで守山市立守山南中学校2年生の川那辺紗名さんが平和メッセージ「次世代につなげていきたい」を読み上げた。



平和メッセージを述べる川那辺紗名さん

今、日本は戦争を始めていません。しかし、いつかまた戦争が始まるかも知れません。私たちが戦争を学び始めたときからは、小学校4年生の頃に学校から配られたチラシの中に、滋賀県平和祈念館の子ども向け体験型学習「平和の学校あかり」がありました。私たちが知らないことがあ

り、それを見た母が「参加してみたら」と声をかけてくれたからです。初めの頃は、戦争について全く分かっていなかったのに、参加してから戦争を深く考えるようになった。ここで学んだことはたくさんあるけど、まだまだ知らないことがあ

るとあると思っていた時に、学校から「遺族会の次世代参観ツアー」で鹿島島に行ってみようという機会が。これはチャンスと思いき、行くことにしました。

内容は、特攻隊についてでした。2泊3日でたくさんのお話を聞くことができ、戦争に触れることができた。その中でも一番思い出深いのは、特攻隊員宮川三郎軍曹のホタルの話です。私はこの話を聞いて、ホタルになってでもお母さんに会いたかったのだと思いました。

今年7月26日から8月1日まで私はサイパンにいました。理由は、サイパンで起きた戦争を学ぶためです。三宅蓮の方と、滋賀県の小中高

生と長野県から来た小学生5人、合わせて40人ほどの人たちと一緒に参観しました。サイパンで学んだ中で一番思い出深いのは、戦跡観光地「ラストコマンドポスト」です。錆びて朽ちかけた日本軍の戦車や大砲、日本軍最後の司令部跡が今も残っています。ここで思ったことは、戦争が終わって73年も経つのに、見て分かるそのままの形で残っているという事です。そして、戦争に触れることができない場所だと思ってしまう。とても興味深い町です。

サイパンには今も戦争の歴史が残っています。バンザイクリフでも、米軍に追い詰められたたくさんのお話や、民間人が「万歳」を叫びながら、80メートル下の海に身を投げている話です。

実は、バンザイクリフの歴史を綴った歌があります。サイパン小唄です。歌詞の中に「どんな気持ちで 波間に消えた時代は遠くはなれても なんてむなしく 忘れりよか風も泣きます バンザイクリフ」とあります。私はこの歌詞を聞いて、共感しました。たくさんの方が亡くなられて胸が

痛みます。ですが、自分の目で戦争の跡を確認できて良かった。そして私は、身近に戦争に触れることがいらないと思いましたが、当然怖いと考える人はいると思います。しかし、これをきっかけに戦争への思いが強まり、戦争を二度としないと思えると思えます。

最後に、詩人・石垣りんさんの詩を贈ります。

戦争の記憶が遠ざかるとき 戦争がまた近づく そうでなければ良い

この詩のとおり、戦争の記憶は消えてはいけません。命を一時で奪うのが戦争です。戦争が二度と起きないためにも、次世代に戦争とは何かを伝えていかなければなりません。だから私は、まだまだ戦争とは何か、平和とは何かを見つめていき、勉強して、今ある幸せに感謝したいです。

三宅蓮 大津市坂本の寺院(相木寛照住職)で、戦没者の慰霊や国際交流のため、小学6年、高校3年を毎夏大東亜戦争の激戦地・サイパン島に派遣している。相木住職は若者に平和の尊さや戦没者の苦難を伝え、国際的視野を養ってもらうため、1978年から派遣を始め、これまで約1500人が参加している。

て不断の努力を続けていく」と誓った。一同黙祷のあと、川島隆二滋賀県議長、大長弥宗治滋賀県遺族会会長の追悼の辞が読み上げられ

滋賀県平和祈念館事業の「平和の学校あかり」や遺族会次世代参観ツアーに参加した経験、サイパンを訪問した体験から「戦争を二度とし

てはいけない」「次世代に戦争とは何かを伝えていかなければいけない」「今ある幸せに感謝したい」と、しっかりと口調で力強く訴えた。

(広報 北村 哲雄)

ロビーでは、パネル展示がなされ、小学生の平和ポスターや、日章旗と遺品が展示され、参加者の目をひいた。

「戦争の記憶が遠ざかるとき 戦争がまた近づく そうでなければ良い」

最後に、詩人・石垣りんさんの詩を贈ります。

戦争の記憶が遠ざかるとき 戦争がまた近づく そうでなければ良い

この詩のとおり、戦争の記憶は消えてはいけません。命を一時で奪うのが戦争です。戦争が二度と起きないためにも、次世代に戦争とは何かを伝えていかなければなりません。だから私は、まだまだ戦争とは何か、平和とは何かを見つめていき、勉強して、今ある幸せに感謝したいです。

平和メッセージ

次世代につなげていきたい 戦争が二度と起きないために

守山市立守山南中学校2年 川那辺 紗名

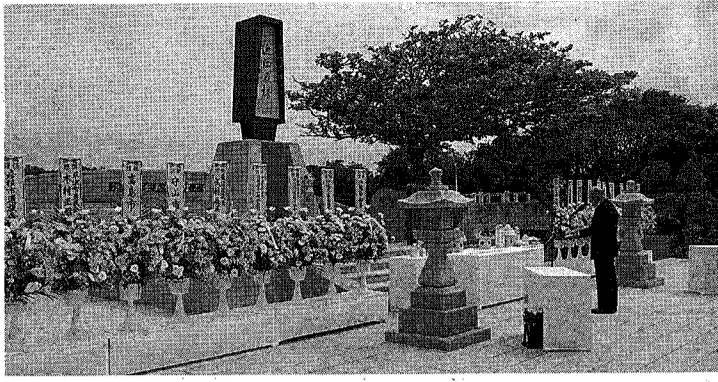
ロビーでは、パネル展示がなされ、小学生の平和ポスターや、日章旗と遺品が展示され、参加者の目をひいた。

(広報 北村 哲雄)

戦没者追悼式

平成30年度 沖縄「近江の塔」

戦没者追悼式と 戦跡慰霊巡拝に同行して



「近江の塔」の前で式辞を述べる岸田孝一前滋賀県遺族会長

平成30年度沖縄「近江の塔」戦没者追悼式と戦跡慰霊巡拝は、5月12日から14日の2泊3日で行われました。岸田孝一前滋賀県遺族会長を団長に、来賓の滋賀県知事代理で川崎辰巳健康医療福祉部長、川島隆二滋賀県議会議長、吉田清一滋賀県議会議長をはじめ5人の県議会議員、滋賀県議会議員はじり、武村展英衆議院議員、森貴尉守山市議会議長ほか多数の方々のご参加を賜り、担当する英霊顕彰委員会の6人を始め、総勢52人が参

列して実施しました。12日の早朝より、県内各地から送迎バスに同乗して一路大阪伊丹空港に向かい、空港ロビーで結団式を行いました。連絡事項の徹底と顔合わせで参加者のつなごりを確認し、荷物検査も無事終了後、全員搭乗、機上の人となりました。約2時間余りで沖縄那覇空港に到着後、ひめゆりの塔を見学参拝し、摩文仁の丘に建つ「近江の塔」に到着。ご来賓の沖縄県知事代理はじめ沖縄県議会議

長、糸満市長、平和祈念財団会長、沖縄県遺族会長と合流したのち、追悼式と慰霊祭・平和祈念式典を執り行いました。ご来賓から追悼の言葉をいただき、呼びかけの言葉は長浜市の中川真澄さん、甲良町の西川誠一さんが述べられました。参列者一同深く感激いたしました。

次に、平和宣言を行い、全員の献花で盛大な平和祈念式典を終えることができました。2日目は、今回初めての試みで、那覇漁港から東シナ海まで貸切船で移動して、洋上慰霊祭を行いました。焼香の後、全員で菊の花を洋上に献花して、初参加の遺族会員の呼びかけと英霊に対し重厚な塔婆回向の慰霊法要を行いました。天国から見守ってくださる英霊のお陰で快適な天候に恵まれ、盛大な慰霊法要ができました。ご来賓の皆様

方お一人ずつのご丁寧なご参拝に、一同感動の慰霊巡拝となりました。最終日の沖縄県護国神社昇殿参拝では宮司のお出迎えを受け、玉串奉奠の際には毎年ご参拝に感謝のお言葉をいただきました。今年度の沖縄戦没者追悼式と慰霊祭・平和祈念式典並びに戦跡慰霊巡拝も何のトラブルもなく、予定どおり無事に終了することができました。参加されました遺族会員の皆様のご協力や、ご来賓の皆様格別のご配慮と委員会スタッフ

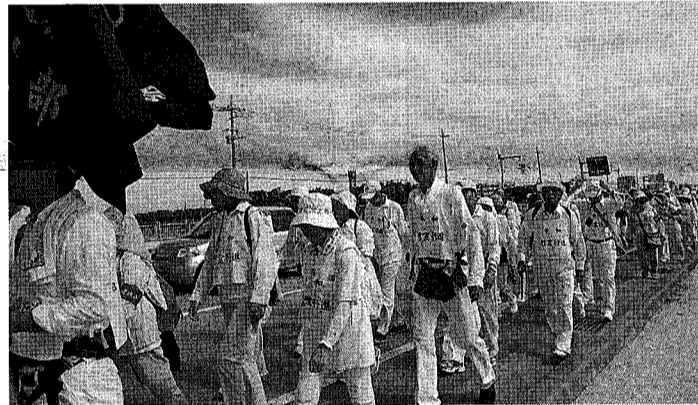
の皆様のご協力に感謝しお礼申し上げます。(前英霊顕彰委員会 委員長 田中 靖俊)



糸満市喜屋武岬「平和の塔」前での慰霊祭に参列の皆さん

第57回沖縄平和祈願慰霊大行進

「平和の詩」の朗読に感動



平和祈念公園までの8.5kmの道のりを黙々と行進

6月23日、日本遺族会と沖縄県遺族連合会共催の「沖縄平和祈願慰霊大行進」と沖縄県、沖縄県議会主催の「沖縄全戦没者追悼式」に和田幸男さん(彦根市)、松浦友一さん(東近江市)と3人で参加しました。

沖縄は梅雨が上がり「カンカン照り」で暑いのかと予想をしていますが、それほどでもありませんでした。旅行の手配等は「旅助」の心ゆくサービスで快適。行進は糸満市役所前から平和祈念公園

の8・5キロを歩きました。以前は10キロ程歩きましたが、今は改修されて少し距離が短くなったようです。行進する人の平均年齢が高くなってきて、救護バスを利用する人がありまして、それで良いのです。参加をしようと思ふその意欲が大切なのです。車椅子で行進する人もいました。中学生も歩いていました。少し小柄な中学生が途中から先頭の横断幕を持って歩いていました。何事にもプロがいま

す。新聞のカメラマンがすかさずその中学生をカメラに収めていました。そして号外や翌朝の沖縄の新聞に掲載されました。さすがプロのカメラマン、見るどころが違います。でも、我が家で読んでいた全国紙には掲載されていませんでした。「寂しいな」。沖縄と本土ではかなりの温度差があるように感じます。

平和祈念公園に設置された大きなテントの会場に入ると、そこには遠慮がちに「戦没者の慰霊祭会場です、厳粛をお願いいたします」と書かれていました。やがて国会議員、政府要人、衆参両院議長、沖縄の関係者、アメリカ政府関係者、そして安倍晋三首相が

着席して追悼式が始まりました。翁長雄志沖縄県知事はやつれた感じでした。それにしても要人警護のための私服警官の多いこと。それぞれが「これでもか!」と思うくらい怖い顔で我々を見つめていました。自分の家庭に帰ってもこの顔だろうか?と思うと少しおかしくなりました。翁長知事や安倍首相の挨拶があると、賛成のヤジや口笛がありました。また、「安倍は帰れ」等のヤジも飛びました。2千人とも言われる参列者が、戦争で命を落とした人々を思い、涙を流している会場で、もう少し静かに人の話を聞けないものかと私は空しい思いをしました。

当初は気の進まない旅でしたが、来てよかった、何ものにも代えられないものをいただきました。それは、浦添市立港川中学校3年相良倫子さんの「平和の詩」の朗読です。皆さんもテレビの画面でご覧になったと思いますが、間近で見るとその迫力はすごいものでした。「生きる」詩の内容や思い、その構成が良くできていたことに加え、それを朗読する力が秀逸でした。凛とした表情で、真つすく前を見つめ、一度も原稿を見ずに感情豊かに7分半を見事に詠い上げました。翁長知事、安倍首相、政府要人、アメリカ軍司令官を順々に睨みつけようという話

す。思わず安倍首相がたじろぎました。2泊3日の沖縄の旅も、相良さんの詩の朗読を聞いただけで元が取れたように思います。最後になりましたが、和田さんのお父さんが沖縄で亡くなられています。それで特に沖縄への思いが強いように感じました。痛い足を引きずりながら行進され、「近江の塔」では生花、線香、ローソクをお供えされました。3日目にはお父さんの祀られている慰霊碑へ大きな花束やお供え物を持ってタクシーで行かれました。私にはなかなかできない行動です。(英霊顕彰委員会 副委員長 木下清彦)

感動と感銘にひたすら 日本語の辞書に「感動」とは、心が物事を受け止めて、深く動かされることとあり、感銘とは、忘れられないほど深く感動し、心に刻み込まれることと記されています。世間の誰もが経験する喜怒哀楽の中にも、感動された事柄が数多くあることでしょう。私たちが滋賀県遺族会では英霊顕彰事業として、海外戦跡慰霊巡拝を毎年実施しています。戦跡地での慰霊法要で、肉親の英霊に対して呼びかけ

の言葉を受けつけられませんが、その第一声は決まっています。「お父さん」です。この世に生まれて初めてこの言葉が発して、面々と呼びかけの報告をされる姿を目の当たりにしますと、来賓の方々が仲間たちが一様に確かな感傷に浸るものです。その後の英霊をお慰めする懐かしい故郷の唱歌や童謡の合唱も、目頭が熱くなるほど感動します。私は何度も海外戦跡慰霊

の旅に参加しましたが、いつも変わらぬ場面でありながら、その都度深い感銘を受けている自分がそこにいることに、今改めて喜びを噛みしめています。英霊のご加護により今日まで元気に生かされている自分は幸せ者であり、それは一番の喜びであると感じています。以上のような思いを抱き、また感傷にふけるのも老化現象となる「終活」の一端かなと思っております。(広報委員会 委員長 田中 靖俊)

14歳の少女が読み上げた 「平和の詩」の衝撃 著名人も絶賛

6月23日、沖縄全戦没者追悼式で、沖縄県浦添市立港川中学校3年生の相良倫子さんが自作の平和の詩「生きる」を朗読しました。



「平和の詩」を朗読する相良倫子さん

躍動感のある言葉で織りなされた壮大な抒情詩は、激しい地上戦を生き抜いた曾祖母の体験をよく聞かされ、平和について考える機会が多くなり、「私なりに考えて、自分の命を精いっぱい輝かせていくことが平和だと思った」と、詩に込めた思いを語っています。

その詩の内容や朗読に心打たれ、多くの政治家や芸能人、アーティストら著名人が絶賛。そのすばらしい詩の全文を紹介します。

生きる

浦添市立港川中学校3年 相良倫子

私は、生きている。
マントルの熱を伝える大地を踏みしめ、心地よい湿気を孕んだ風を全身に受け、草の匂いを鼻孔に感じ、遠くから聞こえてくる潮騒に耳を傾けて。

私は今、生きている。

私の生きるこの島は、何と美しい島だろう。

青く輝く海、

岩に打ち寄せしづきを上げて光る波、

山羊の嘶き、

小川のせせらぎ、

畑に続く小道、

萌え出づる山の緑、

優しい三線の響き、

照りつける太陽の光。

私はなんと美しい島に、生まれ育ったのだろう。

ありつただけの私の感覚器で、感受性で、島を感じる。心がじわりと熱くなる。

私はこの瞬間を、生きている。

この瞬間の素晴らしさがこの瞬間の愛おしさが今と言う安らぎとなり私の中に広がりゆく。

たまらなく込み上げるこの気持ちをどう表現しよう。

大切な今よ

かけがえのない今よ

私の生きる、この今よ。

七十三年前、私の愛する島が、死の島と化したあの日。小鳥のさえずりは、恐怖の悲鳴と変わった。

優しく響く三線は、爆撃の轟に消えた。青く広がる大空は、鉄の雨に見えなくなつた。

草の匂いは死臭で濁り、光り輝いていた海の水面は、戦艦で埋め尽くされた。

火炎放射器から吹き出す炎、幼子の泣き声、

燃え尽くされた民家、火薬の匂い。

着弾に揺れる大地。血に染まった海。

魑魅魍魎の如く、姿を変えた人々。

阿鼻叫喚の壮絶な戦の記憶。

みんな、生きていたのだ。

私も何も変わらぬ、

懸命に生きる命だったのだ。

彼らの人生を、それぞれの未来を。

疑うことなく、思い描いていたんだ。

家族がいて、仲間がいて、恋人がいた。

仕事があった。生きがいがあった。

日々の小さな幸せを喜んだ。手を取り合

つて生きてきた、私と同じ、人間だった。

それなのに。

壊されて、奪われた。

生きた時代が違う。ただ、それだけで。

無辜の命を。あたり前に生きていた、あ

の日々を。

摩文仁の丘。眼下に広がる穏やかな海。

悲しくて、忘れることのできない、この

島の全て。

私は手を強く握り、誓う。

奪われた命に想いを馳せ、

心から、誓う。

私が生きている限り、

こんなにもたくさん命を犠牲にした戦

争を、絶対に許さないことを。

もう二度と過去を未来にしないこと。

全ての人間が、国境を越え、人種を越え、

宗教を超え、あらゆる利害を越えて、平

和である世界を目指すこと。

生きる事、命を大切にできることを、

誰からも侵されない世界を創ること。

平和を創造する努力を、厭わないことを。

あなたも、感じるだろう。

この島の美しさを。

あなたも、知っているだろう。

この島の悲しみを。

そして、あなたも、

私と同じ瞬間(とき)を

一緒に生きているのだ。

今と一緒に、生きているのだ。

だから、きつとわかるはずなんだ。

戦争の無意味さを。本当の平和を。

頭じゃなくて、その心で。

戦力という愚かな力を持つことで、

得られる平和など、本当は無いことを。

平和とは、あたり前に生きること。

その命を精一杯輝かせて生きることだとい

うことを。

私は、今を生きている。

みんなと一緒に。

そして、これからも生きていく。

一日一日を大切に。

平和を想って。平和を祈って。

なぜなら、未来は、

この瞬間の延長線上にあるからだ。

つまり、未来は、今なんだ。

大好きな、私の島。

誇り高き、みんなの島。

そして、この島に生きる、すべての命。

私と共に今を生きて、私の友。私の家族。

これからも、共に生きてゆこう。

この青に囲まれた美しい故郷から。

真の平和を推進しよう。

一人一人が立ち上がって、

みんな未来を歩んでいこう。

摩文仁の丘の風に吹かれ、

私の命が鳴っている。

過去と現在、未来の共鳴。

鎮魂歌よ届け。悲しみの過去に。

命よ響け。生きゆく未来に。

私は今を、生きていく。

世界平和へ一歩ずつ

栗東市立葉山中学校2年 森谷 心温

7月7日、栗東芸術文化会館さきらで、栗東市青少年育成市民会議主催の中学生広場「私の思い2018」栗東市大会が開催されました。中学生の未来への「夢」や「希望」、そして「思い」を市民の皆さんに聞いていただく発表会です。國松善次滋賀県遺族会相談役の日章旗返還の講演を聞いて、その感想等を発表し、見事優良賞を獲得した森谷心温さんの「今を生きている中学生の思い」を紹介します。

世界平和へ、一歩ずつではありますが近づいていっていると私は思います。そう感じた理由は、私がある二つの出来事を経験したからです。

一つ目は、2017年の夏休みに、太平洋戦争に関するある講演の案内を祖母から聞き参加したことです。旧日本兵の遺品返還活動に取り組まれている団体「OBONソサエティー」(以下「OBON」という)の一人の國松善次さんの話でした。戦争当時、アメリカ兵が勝った証しとして日章旗を戦場から自分の国に持ち帰ったという話を聞きました。

しかし、近年になって、「OBON」の取り組みによって日章旗が返還されているという新聞記事を見せられた。その場で見せていただきました。また、今年の4月には、

アメリカから彦根市へ日章旗が返還されたのを私はニュースで見ました。それらの写真やニュースの中では、日本の遺族もアメリカの遺族も微笑んでいる表情が分かりました。きっと、日本の遺族は「日章旗を返還してもらえて嬉しい」と思うと同時に、アメリカの遺族も「日章旗を返還できて嬉しい」という思いをお互い持っているのだと私は感じました。

つまり、日本の遺族にとつて日章旗がどれほど大切なものであるかということをアメリカの中で気づいているのだと思います。日章旗の返還が続々とされているのは、私が聞いた「OBON」の活動があつてこそアメリカと日本が通じ合せてきているからではないかと感じました。

日章旗返還の講演を聞いた時に、2016

遺族会活動を振り返り、今後に思うこと

栗東市遺族会 的場 恵美子

私は、昭和37年ごろ遺族会に入会しました。その当時思い出深かったのは、昭和39年にまだ返還されていない沖縄へ「近江の塔の除幕式および慰霊祭」に参加したこと。

日本政府総務府発行の身分証明書を持って、船で往復の7泊8日の旅でした。ドル(1ドル365円)を使つての買い物、街の看板はローマ字、異国へ来たように思いました。

その後、結婚。主人の転勤等々で栗東を離れ、再び栗東に住むようになり、昭和59年、再度入会し、地元滋賀県遺族会の役員としていろいろな事業に参加させていただきました。

副会長、女性部会長としての6年間で印象に残るのは、初めて日本遺族会の女性部研修会に参加した時の「遺族会員の高齢化と会員の減少、後継者について」の講演でした。自分の年齢を考えると当然のことですが、滋賀県遺族会ではこの問題について、まだ具体的に話し合うこともありませんでした。

しかし、他の県では後継者についての「検討委員会」を立ち上げたり、すでに「青年部」を結成されている県もあることを知り、衝撃を受けました。

角野彰夫前事務局長も、事務局長会議の中で、平成23年に女性部からの提言を受けて、「青年部の組織化」について議題に上がっていたとのことでしたので、今後滋賀県遺族会ではどのように進めていくか、二人で何度も話し合いました。様々な議論が出て、丁々発止のやりとりをしました。

今は亡き高島市の兼子久司さんの発案で、「遺族会活動の後継者の育成と戦争についての歴史勉強会」を目的に、平成14年に第1回目として、「平成13年度次世代戦跡訪問研修」が実施され、現在も継続されています。私も8年間この事業に携わってきました。

会を担うリーダーになってくださると確信しております。

2月現在で、結成された支部27、結成予定9支部で、後継者に対する考え方も異なり、青年部組織を作らないという県もあり、青年部に対する温度差もありました。

もう一つの事業の女性部研修会は、戦没者の妻たちが永年にわたり実施されてきた事業で、一体化されてからも「婦人部研修会」「リーダー研修会」等と名称を変えながらも引き継いできました。財政状況が厳しい中、限られた予算でどのように実施するか、また講師の方はタイムリーな人で、タイムリーな講演内容等いろいろと考えお願ひしていただきました。参加された男性の方からも好評で、自画自賛ですがこの研修会も評価され、補助金をつけるよう熱心に滋賀県に掛け合い、要望していただいたお陰で補助金もつきました。

この6年間、いろいろな場所へ行く機会を与えていただき、多くの方々とお会いして、支えや指導、厳しくも温かい助言をいただき、学ぶことも多く、この絆、経験が私の大きな財産となりました。また、厚生労働大臣表彰の栄に浴しましたことに心から感謝し、お礼申し上げます。充実した6年間でしたし、悔いのない6年間でした。

平成31年度は「婦人部結成65周年」の記念すべき年になります。戦後、全国で約45万人いた戦没者の妻も、滋賀県遺族会では平成30年度の特別会員(戦没者の妻)が1500人を切り、遺児の平均年齢も77歳と高齢化し、遺族会を取り巻く環境はますます厳しく、多難な状況になりました。

組織活動の維持には財政基盤の確立が欠かせないため、「財

政事業改革特別委員会」が設けられ、組織存続のための財源の確保にいろいろと検討されてきました。青年部の育成も重要なことだと思えます。

平成26年に大規模に実施した「戦没者の孫・ひ孫の実態調査」の会員名簿をもう一度見直し、整理して、新規会員への入会の働きかけに努めるとともに、「次世代戦跡訪問研修」に鹿児島方面17回、沖縄方面5回実施され、延800人以上の方が参加されました。この参加者名簿も整理して、青年部の趣旨に賛同される方に入会をお願いするなど、青年部組織の拡充強化が会員の減少を食い止め、増加につながり、遺族会の活性化、継承になると思っています。

戦後73年が経過し、戦後生まれの総人口の8割を超え、戦争の記憶が薄れようとしている今日、忘れてはいけない、見過ごしてはいけない歴史があります。

謙虚に過去を振り返るとともに、戦争を体験した私たちの世代から、戦争を知らない世代に悲惨な体験や、日本がたどった歴史を正しく伝え、記憶を記録として残しておくことが大切です。

青年部の方たちは、年齢的にもそれぞれの立場とか職場の中で中心となって活躍されている世代という現状を考えますと、直ちに後継者ということは大変難しいと思います。

日本遺族会の青年部事業の柱として、7項目を中心に活動することが確認されましたので、青年部が自主性を持って積極的に取り組む、遺族会の中核となるよう、今後も郡市町会長、女性部、会員等が情報を共有しながら支援していくことが必要です。力を合わせることで、遺族会を次の世代につなぐことを願ひ、私の思いをいたします。

伯父さまに会えたようでありがとうございました。涙の思いばかりです。ミヤマーに行きたいです。(神戸市女性)

英霊となった叔父さんの若い写真を見て「安らかに眠ってください」と願わずにはいられません。(東近江市夫婦)

兄の写真飾っていただいで感動しました。ありがとうございます。(兵庫県女性)

してはいけない歴史があります。謙虚に過去を振り返るとともに、戦争を体験した私たちの世代から、戦争を知らない世代に悲惨な体験や、日本がたどった歴史を正しく伝え、記憶を記録として残しておくことが大切です。

青年部の方たちは、年齢的にもそれぞれの立場とか職場の中で中心となって活躍されている世代という現状を考えますと、直ちに後継者ということは大変難しいと思います。

日本遺族会の青年部事業の柱として、7項目を中心に活動することが確認されましたので、青年部が自主性を持って積極的に取り組む、遺族会の中核となるよう、今後も郡市町会長、女性部、会員等が情報を共有しながら支援していくことが必要です。力を合わせることで、遺族会を次の世代につなぐことを願ひ、私の思いをいたします。

母と兄弟姉妹7人てたどり着きました。地獄の幼少期でした。(無記名)

「入館者ノートより抜粋(原文のまま)」平成30年1～8月の来館者(ノート記帳者のみ)

8月来館者過去最多!!

1月 55人
2月 17人
3月 21人
4月 20人
5月 46人
6月 16人
7月 9人
8月 86人

英霊顕彰館も10月で満2年となります。8月は「みたま祭」の盛況で、開館以来

「みたま祭」期間中來館者で賑わう英霊顕彰館

◆滋賀県護国神社 英霊顕彰館だより◆

戦争の風化が深刻化している昨今、若い世代の人たちに来館していただき、遺影・展示物をご覧になって、日本が平和・自由を謳歌できる今とは違う時代があったことを感じていただきたいと思えます。(彦根市遺族会 原 幸男)

英霊顕彰館も10月で満2年となります。8月は「みたま祭」の盛況で、開館以来

「みたま祭」期間中來館者で賑わう英霊顕彰館

「みたま祭」期間中來館者で賑わう英霊顕彰館



中学生広場栗東市大会で受賞した森谷心温さん

年、当時のアメリカのオバマ大統領が広島を訪れたことを思い出しました。過去の戦争について、日本と一緒に向き合いたいという思いを私は感じて、オバマ大統領の行動が日章旗返還のような現在の活動につながったのかも知れないと感じました。現在のアメリカと日本の関係を知って、オバマ大統領の行動は、歴史に残るものだったと改めて感じ、すばらしいことだと思いました。

二つ目は、4月27日に話題となった、北朝鮮と韓国の会談です。この2か国は11年ぶりに会談を開いて、境界線が両国がつながりあったかのようになり、取り合つて往復する姿が印象に残りました。その時、両国の首脳はこの機会を通じて、何か変われば良いと望んでいたと思います。私もそれを強く望みます。会談の中で、非核化という話が出てきたのは、世界平和へ近づこうという思いを持つていたからだと思います。北朝鮮だけではなく、世界全体で非核化へつなぐためには世界の力が必要だと思

います。核兵器を製造せず、持たず、持ち込みを許さずという日本政府の方針である非核三原則という言葉が世界へ広がり、各国が実行すればより世界平和へ道が開くと思います。今、中学生である私ができることは、私が講演で聞いた話を私の周りの人にも伝えていくことだと思えます。例えば、戦争当時の思っただけではなく、遺族の人たちが体験されたことや、遺族の人たちの思いについてです。学校の道徳や人権について考える場でのこのような意見をあげたり、私は生徒会に入っているので、文化祭や全校の場などでも少しづつ伝えていければよいと感じました。

世界平和を築いていくためには、自分の国だけではなく、世界全体を平和にしていかなければならないと思えます。他国を尊重・思いやる気持ちは持つて、戦争など必要ないと感じ、少しづつでも実行されてきている今こそ、平和な世界が生まれるのではないのでしょうか。



悪天候に備え、参集所で行われた野洲地区戦没者慰霊祭

野洲市遺族会 会長 永田 征二

戦没者慰霊祭と日章旗返還式

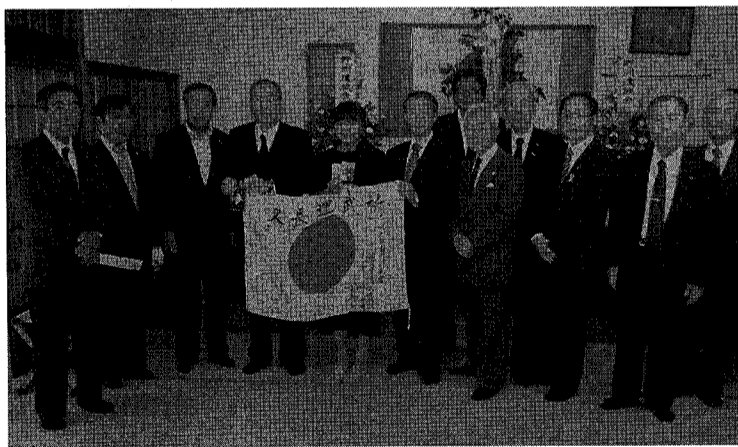
あひまのなみ

去る9月8日、御上神社境内の英霊奉斎殿前の参集所にて平成30年度野洲地区戦没者慰霊祭を斎行しました。

生命に危険な猛暑が続いた後、台風20号、21号が次々と来襲し、奉斎殿周囲は枯葉や折れた枝、吊り下げた提灯も2、3個飛び散るなど見ても無残な姿となっていました。これを大急ぎで取り除き清浄にして慰霊祭を迎える準備をしました。が、当日は雨天予測のため急遽、参集所に祭壇を設けて式典をする段取りとなりました。

今回は慰霊祭終了後、日章旗返還式を行うことから千葉県いすみ市国際交流協会の高橋奈緒美様、滋賀県遺族会から國松善次相談役、山川芳志郎副会長、長岡功事務局局長等に参列いただきました。野洲地区517柱の御英霊が祭られていた祭壇の御前で御上神社司宮様の祝詞奏上、地区会長の祭文、ご来賓の弔辞、玉串奉奠と粛々と続き、一般会員の白菊献花、役員の方々の謝辞で締めくくり無事終えることができました。

追悼慰霊されたとのこと。また、平和教育としていくつかの小学校で日章旗のお話しをされました。日章旗にはご存知の通り住所が書き込まれていません。ところが幸いに「滋賀県立栗太農学校」とあったことから、滋賀県湖南地方のご英霊ではないかと推測から県遺事務所および関係遺族会の懸命の調査で野洲市の方であることが判明した次第です。



日章旗返還式立会人と返還された日章旗

返還式は川波慶一野洲市遺族会副会長の司会で進行し、大長会長の挨拶、長岡事務局長と高橋様から経過説明があり、山仲野洲市長他6人の方々の立会いのもと高橋様から永田野洲市遺族会会長に手渡されました。

日章旗は月日の経過でそれなりに赤茶けてはいるものの、あまり汚れていなくてつるつるとした布(おそろく絹地ではないかと思われ)で、ご英霊が御身大切にしておられたことがそこはかとなくわかりました。

その後、立会人を代表して山仲市長から国際交流の大切さなどのあいさつ、続いて國松相談役から返還の全国的な動向や日章旗に対するアメリカ、日本のとらえ方の違いなどの解説をしていただきました。引き続き記念写真など撮影して無事終了することが出来ました。

【みたま祭】 英霊への感謝と世界平和を願い 5000の灯り



企画展示など様々な取り組みで賑わったみたま祭

滋賀県遺族会が主催する「みたま祭」が、8月13日から15日まで彦根市の滋賀県護国神社で齊行された。みたま祭は、明治元年の戊辰戦争から大東亜戦争までの数々の戦いにおいて、祖国日本、故郷滋賀の平和のため尊い命を捧げられた滋賀県内3万4千余柱の御霊を慰めるとともに、感謝の誠と平和への祈りを捧げるため、昭和52年8月から毎年お盆の時期に行われている。現在では、湖国の夏の風物詩として親しまれている。

42回目を迎えた今年も、境内には約5000灯の提灯が飾られ、13日午後6時から点灯式が行われた。期間中、境内に灯される提灯は、一歩足を踏み入れれば幻想的で厳かな、そして日本の夏祭りらしい雰囲気も味わえる(点灯は午後6時から9時30分まで)。

14日は、午後6時から献灯協賛者安全祈願祭があり、大長弥宗治滋賀県遺族会会長らが玉串奉奠し、祭の恙なきを祈願した。

15日は、日本武道館で行われる政府主催全国戦没者追悼式に合わせ、午前11時30分から滋賀県戦没者追悼慰霊祭が行われ、山本賢司司宮による祝詞奏上の後、大長会長らが玉串を奉納した。祭典後、参集殿でおにぎりや味噌汁が振る舞われた。また、午後6時から県下戦没者追悼慰霊祭も行われた。

期間中、翼廊では滋賀県遺族会による遺骨収集のパネル写真、華道・翠香流の竹中翠香さんと翠香流社中による生け花、彦根きり絵研究会によるきり絵あんどん等が展示され、多くの参拝者で賑わった。

また、境内にて「夕市とビアガーデン」、彦根市遺族会の「ひこねで朝市」、実行委員会による各種模擬店が出展され、戦争を知らない世代が多くなった今、次の世代に伝えたいと、様々な取り組みが行われた。今年の献灯数は4046個で、昨年より196個減少となった。(広報 川合 良雄)

みたま祭 滋賀県戦没者追悼慰霊祭 来賓参列者

Table listing guests and attendees for the festival, including names and titles of various officials and members.

(順不同敬称略)

参列者全員が思いを込めて献花

高島市遺族会 川合 良雄

8月18日、高島市主催、高島市教育委員会・社会福祉法人高島市社会福祉協議会・高島市遺族会・高島市青年協議会主催による「平成30年度高島市戦争犠牲者を追悼し平和を誓う市民の集い」が高島市民会館で開催され、市内各地から遺族をはじめ、市民や来賓の皆さん約400人が参列した。

会場は舞台中央に菊花で埋められた見事な祭壇に「追悼と誓いの碑」の標柱が凛と立ち、その前に献花台が置かれた。

式典は開会のことは、黙祷と続き、福井正明高島市長が式辞で「遺族会の皆さんを中心に、戦争の悲惨さを語り継いでいただいている。戦争を知らない世代が増えていく中で、戦争の悲惨さをせひとも私たちの子どもや孫にも伝えていかなければならない」と述べられた。

次に、廣本昌久高島市議会議長、清水鉄次・海東英和滋賀県議会議員から追悼の言葉を述べられた。続いて、3月の次世代戦跡訪問研修参加者の感想文の発表が行われた。



次世代戦跡訪問研修の感想文を発表する皆さん

発表に先立ち、司会者から「次世代戦跡訪問研修は滋賀県遺族会の事業で、戦争について語り継いでいくべき次世代の若者に広く呼びかけ、この研修を通じて戦争の歴史に直接触れよう、平和の実現に寄与する人になつてもらうことを期待し、実施しているものである」と紹介があった。

感想文は、伊藤千里さん（安曇川中学校1年）、北村真湖さん（安曇川中学校1年）、中川優さん（安曇川中学校1年）、山田璃子さん（栗東高校1年）の4人が発表。次世代戦跡訪問研修を通して、「戦争の悲惨さ、命の尊さ、平和の尊さを改めて感じ、戦争は二度と繰り返してはいけないことを強く心に思った」「戦争の悲惨さを知らない人に伝えていこうと思った」等語をつづらされた。

休憩をはさんで、ソプラノ・池田真里子さん、ピアノ・木村麻美子さんによる「庭の千草」「からたちの花」「ふるさと」の献奏。

続いて、高島市青年協議会の皆さんによる詩の朗読「献花へ」と移った。参列者全員が舞台上がり、それぞれの思いを込めて献花した。

最後に、高島市青年協議会の皆さんによる平和都市宣言「美しく豊かな自然に抱かれた高島市」「核兵器を廃絶し、恒久平和を希う都市宣言」の朗読で閉会となった。

人類は、自らを滅ぼすに十分な悪魔の兵器「核兵器」を作ってしまった。その数は2017年時点で15000発と言われている。しかも1発の威力は、広島・長崎で使用された原爆よりはるかに大きなものとなっている。核兵器をこの世界から完全に廃絶することは難しいが、広島・長崎で被爆した人々の叫びを次の世代にも語り継いでいかなければならない。

平和都市公園建設を提案

米原市遺族会 会長 瀬戸川 恒雄



米原市長と遺族会との懇談会

米原市遺族会の役員と平尾道雄米原市長による忠魂碑についての懇談会が、9月12日、米原市役所にて開催されました。

現在、米原市には忠魂碑が12基あり、建設よりほぼ100年が経過し、中には碑が傾いたり、太い根がはびこり石垣が崩れたり、このまま放置すれば倒壊の恐れがあります。

また、遺族会の高齢化と会員の減少にもない、忠魂碑の管理維持が難しく、数年後には放置されたままになりかねない状況です。このままでは戦没者の御霊に申しわけが立ちません。

何とか、この現状を打開するため、昨年度から、平尾市長と忠魂碑について懇談会がもたれ、平尾市長から平和公園計画が出され、遺族会からは公園の中に忠魂碑を移転することを提案し、前向きに検討することになり、1年が経過しました。9月8日にはルッチプラザにおいて、市民と共に創る都市公園市民会

議が立ち上がり、「都市公園について考えよう」と題して、1回目のワークショップが開催されました。今年度、あと2回ワークショップが開催されます。遺族会の思いや方針を市民の皆様方に理解していただくように、積極的に参加していきましょう。

今回の懇談会の中で、遺族会から、米原市の非核平和都市宣言の主旨をテーマに、平和都市公園を建設していただきたいと提案、市長も賛同され、今後の計画推進の一つの柱にしていきたいとのコメントをいただきました。

米原市遺族会としても、平和都市公園の建設に向けて、現在の忠魂碑の撤去の在り方について意思統一を図りながら、次世代の市民の皆様方には、米原市にもかつて、若くして殉国された多くの戦没者のお陰で今日の平和な米原市があることをしっかりと伝えられるようなモニユメントの建設を提言し、米原市や市民に理解していただけるように働きかけていきたいと願っています。

平和のよろこび展開催

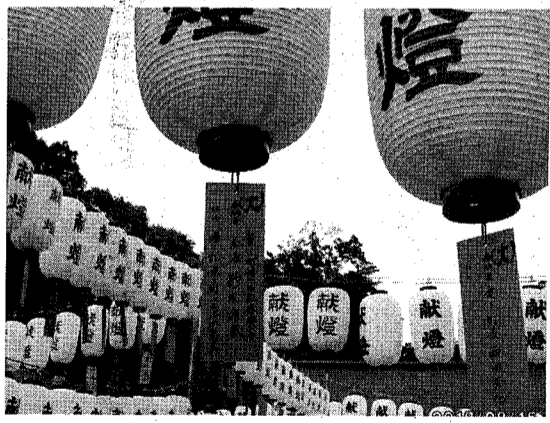
守山市遺族会 会長 山川 芳志郎

毎年恒例の「平和のよろこび展」を8月3日〜10日まで開催しました。今年の展示物は次のとおりです。

- (1) 遺家族等が所有の遺品展示
- (2) 特別企画
 - ① 戦中・戦後のあかりと暖房：多くの方から実物をお借りして展示
 - ② 終戦の日を取り上げた全国版新聞（教社）の展示
 - ③ 故小林育三郎氏の遺品展示

みたま祭 竜王町護国社から献灯

蒲生郡遺族会 会長 西村 久一



戦没者の霊を慰める大型提灯

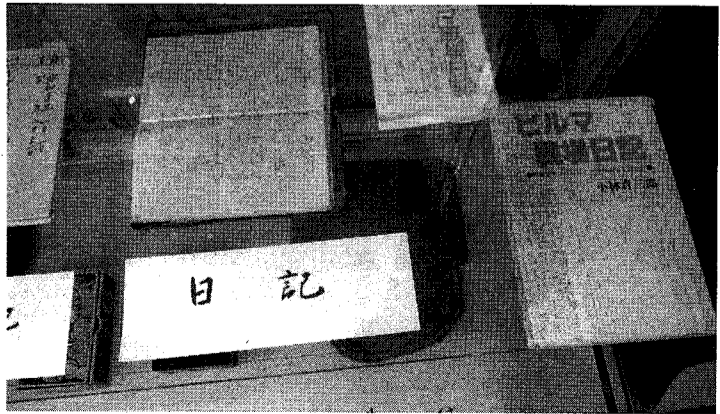
今年も滋賀県護国神社では約500の提灯で県下3万2千余柱の英霊をお慰めし、感謝することができました。竜王町では苗村神社境内に竜王町護国社があり、毎年5月に竜王町護国社奉賛会による大祭と、8月初旬に竜王町遺族会戦没者追悼式を執り行い、町内393柱の英霊を慰霊しております。

今年も、竜王町護国社奉賛会にみたままつりの大型提灯の献灯をお願いしました。蒲生郡でも会員数の減少は否めませんが、会員皆様のご協力で今年も献灯割当数を達成できました。今後とも皆様ご協力の一層のご理解とご協力をお願いいたします。

故小林育三郎氏（現在の守山市守山町・元陸軍少尉）は、激戦地ビルマ（現ミャンマー）で戦い、幸いにも帰国できた方です。小学4年生から日記を書いていたので、戦場でも書き続けたそうです。

また、捕虜から解放され帰国するとき、検査を免れるため靴の中に手帳を隠し持ち帰ったというエピソードを持っておられます。小さい字で書いてあるため読みづらいものですが、貴重な戦場での資料です。展示品はこの手帳をはじめ、軍服や帽子、靴、水筒など約30点でした。（滋賀県平和祈念館から借用展示）

また、故小林育三郎氏を取り上げた「一人芝居」がまたまた8月18日、東京の平和祈念展示史料館（総務省委託）で上演されました。守山市からは5人（故小林育三郎氏の三女と孫、守山市健康福祉政策課長、守山市遺族会から2人）が鑑賞させていただき、感激して帰ってきました。それぞれの企画が故小林育三郎氏



戦場でも日記をしたためた小林氏の手帳など

スポーツの集い開催

草津市遺族会連合会 川井 欣司



多くの参加者を集めたグランドゴルフ大会

5月25日、草津市遺族会連合会恒例のスポーツ大会として、グランドゴルフ大会が栗東市森遊館グランドゴルフ場で開催された。

当日の天候は、晴れのち曇りのまずまずのコンディション。軽い体操の後、4、5人一組で開始。何度もやっていくベテランの方、初めての新人、男女ミックスでの展開だ。

会場が運動場のような平坦ではなく、芝生の上に小山や坂があり、なかなか思うようにボールが転がらず、ホールポスト手前でストップしたり、オーバーしたり、ホールインワンが出たりで、あちこちで歓声上がる。

2ゲームが終わり、スコアカードを提出し、森遊館食堂で表彰と懇親会が行われた。優勝重田美津子さん、2位田内義隆さん、3位伊藤正男さんの表彰があり、その後、飛

おかあさんを訪ねて

佐井 新子さん(97歳・甲賀市)



暑さも過ぎ、秋晴れのさわやかな午後、佐井新子さんのお家を訪ねました。机の前の座布団にきちんと正座されて長時間お話をしていたいただきました。

今年97歳ということですが、背筋もピンと伸び白髪の頭もきれいに手入れされていて、とてもその年齢には見えないお母さんです。お聞きすると2か月に1回程度

パーマ屋さんに行かれるそうです。10数年前に目の手術をされましたが、今は眼鏡無しで毎日の日記を書いていると、日記帳を見せてくださいました。小さな文字でぎっしりと書かれていました。幼いころは喘息で体が弱かったため両親やおばあさんに大事に育てられ、実家とは目と鼻の先の佐井家に嫁がれました。嫁ぎ先はご主人の弟妹を含む大家族でいつも鎌と鋤を持つての野良仕事でした。そのうちに女の子が生まれ、2歳になった可愛い盛りにご主人に招集令状が来て出征、その時お腹には第2子が宿っていました。

やさしい家族に囲まれて

昭和19年12月、南方へ向かう途中の洋上で船が撃沈されて29歳で戦死。新子さんは23歳でした。続いて長女のきよみちゃんがジフテリアに感染して亡くなり、新子さんの悲しみは如何ばかりだったことでしょう。その6か月後、ご主人の忘れ形見となる男児を出産。その後は息子のための家のためにと懸命に働き、立派に育て、家を守ってこられました。

今は息子夫婦、孫夫婦、ひ孫2人で賑やかに暮らしておられます。息子さんのお嫁さんとは喧嘩らしいことは一度もなく、家族皆が優しく「感謝感謝の毎日です」と話されています。「食べ物は何でもおいしくいただきます、家族7人で食卓を囲めるのは幸せ」とのことでした。介護保

(広報 山崎美智代)

形見の従軍手帳

長浜市遺族会青年部 部長 浅見 勝也

私の実家の仏壇の引き出しに、戦死しました祖母の弟、浅見浅男(享年28歳)の書き記した従軍手帳が1冊残されており、これまで断片的に目を通しておりましたが、改めて今回じっくり読み通す機会がありました。

今からちょうど80年前の昭和13年5月に召集を受け、訓練後同年8月に日中戦争従軍のため、上海に上陸してからの一連の行動、また除隊後の住友金

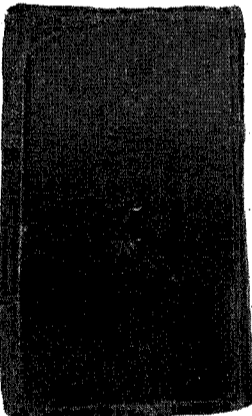
び賞、ホールインワン賞の表彰があった。簡単な反省会の後、親睦を兼ねた食事会が行われた。各テーブルに分かれ、グランドゴルフの成績や日常の遺族会活動のことなど賑やかに雑談。普段交わしたくない会員相互の会話が弾み、今年のスポート大会は無事終了、再開を期し、和やかに解散した。

属での数年にわたる会社員としての日常の生活ぶり、兵役時を含め交友のあった人たちの連絡先、そして当時の流行歌の歌詞などが克明に記されておりました。

その後、昭和17年に再度召集を受け出征し、第16師団衛生隊(垣第6563部隊)の一員として、フィリピン・レイテ島での壮絶な戦闘にて、昭和20年3月1日に戦死と、別途滋賀県から取り寄せた兵籍簿には記録されており

本人は未だカンギボットの山中のどこかに眠っており、遺骨も我が家に帰っておりませんが、他の遺品とともに生きた証の一つとして、これからも大切に保管して参ります。

レイテ島に眠る大祖父の青春が詰まった従軍手帳



滋賀県平和祈念館だより

第21回企画展示 戦場より故郷の家族へ - 戦没者の手紙 -

今回は戦場で亡くなられた方を中心にして、彼らが故郷へ書き送った手紙を紹介しています。

平成30年9月30日(日) ~12月24日(月・祝) (入館無料)

滋賀県平和祈念館 (東近江市下中野町431) TEL 0749-46-0300 開館時間: 午前9時30分~午後5時 (入館は午後4時30分まで) 休館日: 月・火曜日



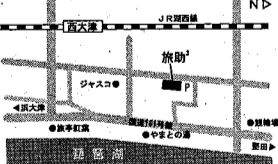
旅のことなら、旅助におまかせください。

個人から団体旅行なんでも取り扱っております。お気軽にご連絡ください。お待ちしております。



滋賀県知事登録旅行業3-188号 有限会社 旅助3 〒520-0024 大津市松山町11-20 TEL: 077-528-2266 FAX: 077-528-2267 URL http://www.tabisuke.co.jp/ 一般旅行業務取扱主任者: 北川 宏

営業時間のご案内 平日 9:00~18:00 土曜 10:00~14:00 定休日 日曜・祝日



名鉄観光 サービス株式会社 大津支店

〒520-0056

滋賀県大津市末広町1-1 日本生命ビル2階

TEL 077-510-0100 FAX 077-510-0030

E-mail: otsu@mwt.co.jp 担当: 前田 豊